

3

自然

加美町は、雄大な自然によって囲まれています。本章で扱う「自然」とは、山や川などの風景や、そこから採れる季節の食材、生息している動物、魚などです。長い時間を通して、自然の風景や生態系は大きく変わってきたようです。その様子を見てみましょう。

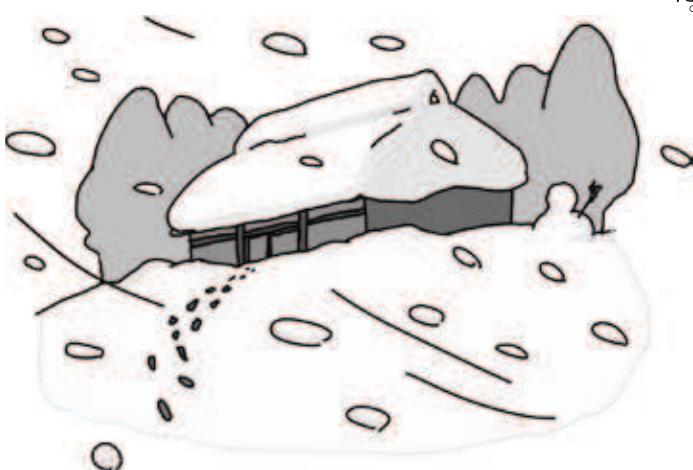
加美町の自然

戦前、人々は自然の恵みや脅威と寄り添つて生活をしていた。機械化や開発が進むにつれ、生活の利便性は向上する反面、豊かな自然やそれと共に歩んだ生活の姿はしだいに消えていく。加美町の自然は常に人々の暮らしを形づくってきた。

昭和前期（～1940年代）

自然と向き合う生活

昭和前期の加美町の自然には、風や雪、大火など自然の猛威に関する印象が強い。日本海側から季節風が山を越えてくるため雪が多くた。また、風が強いところでは大火が起きたため、どの家にも北西方向に居久根（防風林）があった。通学や買い物へは仮橋を渡っていたが、毎回水害で壊れ、その度に周辺の人たちで仮橋を造っていたようだ。防災や整備など人の手は加えられておらず、自然に対しても正面から向き合っていた時代と言える。



『中新田の地形は平坦。小野田、宮崎は丘陵地帯なんだ。西側に奥羽山脈があつて、1500m級の船形山もあるんだ。日本海側からの強い季節風

が低い山を越えてこちらに入ってくるから非常に雪が多いんですね。』

『風が強いから大火も多かった。明治35年の大火が、まちの三分の二も燃やしてしまった。』
(中新田・70代)

『戦前は大火と洪水がよく起っていたね。風も強いから、どの家にも北西方向に防風林を植えていたね。でも当時は経済上昇していた時代だから農家もどんどんブロック塀にしちゃつたね。』
(中新田・70代)

『昔の堤防は今の半分ぐらいの高さで、昭和22年から今のが高さになつた。今見ると、堤防は二段になつていて、下の方が古い堤防で、昭和22年ぐらいに嵩増ししたの。低い堤防の時はぎりぎりまで水が来たことがよくあつたね。』
(中新田・80代)



『仮橋は水害が起ると毎回壊れちゃう。色麻の人たちは中新田の学校に行くために仮橋を渡たる必要があつてね。買い物とかもね。遠回りするど殆どなかつたね。流される度にみんなで集まって何kmもかかつちゃうから。橋は周辺の人々が造つていたね。行政に頼るつてことはその当時は殆どなかつたね。』

造っていた』（中新田・80代）

川では危険がある場所には赤い旗があつて、それがない場所で泳いだり、「うなわ式」や「ごりょうし」、「川干し」などの独自の方法で魚捕りをして遊んでいたようで、自然と遊びがとても強く結びついていた。

『「川干し」つていいって、バケツと網とシャベルを持つて川の水を5～6m止めてね。水を別のところに流すとそこが干上がるでしょ？それで魚を手当たり次第捕つたね。持つて帰ると親に喜ばれてね。』
『田川では赤い旗が立つていて、遊んでいい場所が決められているの。川の深さに応じて時期によつて旗の位置が変わるので。その危険区域を守らないとね。』（小野田・80代）

『川にかけてあつた30センチぐらいの板橋を渡つて隣町に行つてね。川には鮎がいっぱいいてね。鮎をぶん投げてここでカジカを捕つて。方言で言うと「かつか」。当時は箱眼鏡つていう下にガラスが付いている箱を使って覗きながら、ヤス（鈎）つていう、モリみたいなので魚を突いて。』
『当時は水がすごくきれいですね。石投げたら当た

るんじゃないかなつてぐらい大きい鮎がいっぱいいて。』

『投網とか、カラスの羽を紐で結わいで、鮎をそれで追い込んでね。「うなわ式」つていつたのかな。今でもやっていますよ。』

『カジカを捕るのに、板で追い込んで網でとる「ごりょうし」つていう漁があつてね。「ごりょうし」つていう言葉からきたものだと思う。あと私たちは釣り針にミニズをつけて、箱眼鏡でのぞきながら釣る瞬間を見たりね。』（中新田・80代）

『当時は養蚕が盛んだったことも分かる。桑畠や道端にあつた果物は子供たちにとつて貴重なお菓子代わりで、桑の実を食べたり、先輩と一緒に梨を食べたりしていた。』

『学校から帰つてきたら鞄を投げて川に遊びに行つたり、桑畠で遊んだりした。今はあゆの里公園になつてているけど、昔はずつと桑畠ですね。ここには製糸工場があつたからね。明治の時は絹糸ができるんだ。』

『当時はあまりお菓子がなかつたから、そこで桑の実を食べてね。あと人んちの栗とつて怒られたりした。』（中新田・80代）

『桑畑は蚕にやる桑の葉をつくるわけですが、当然桑の実もなるんです。紫色で、ラズベリーみたいになっちゃうですね。随分食べました。』

『桑の実は甘酸っぱいですよ。それを採つてポケットに入れておくと、ポケットが紫色になるんです。その場で採つて食べていましたね。』
(中新田・60代)

『通学の途中に梨がなつていたの。よく見る大きな梨じゃなくて、ちっちゃい梨。先輩が連れて歩いてくれたの。私一年生だったから先輩が食べるよう勧めてきてね。私、食べ方知らないから先輩が教えてくれてね。梨を半分に切つて、それを食べる。歯ごたえは荒い感じで、味もすごい薄いの。だから私はそんなに好きじゃなかつたわ。』

(小野田・80代)

昭和中期（1950‐60年代）

自然の中の生活と地域に根付く知恵

昭和中期でも、川遊びは盛んであつたようだ。川遊びときは、畑からおやつ代わりにトマトやキュウウリなどの野菜を持っていて食べたという。川辺でどうもろこしを焼いたり桑の実を食べたり、川は

子供たちの活動の中心地だったのだろう。

『学校が終わると、みんな川とか山とかに遊びに行つたな。危ないとかそういうリスクを背負つて自然相手に遊んでいたんだね。自然に対する知恵はあつたんじゃないかな。』(宮崎・60代)

『鳴瀬川は、夏は子供の天国ですよ。水泳ぎや、魚捕り。』(中新田・70代)

『川へ向かう途中に桑畑や麦畑がありまして、桑の実を食べながら川に行つて泳ぎます。水泳パンツも水着もない時代ですから、パンツをはいて泳ぎますね。蛸壺で亡くなつた子もいました。』
(中新田・60代)

『畑からトマト、きゅうり、ジャガイモとかトウキビとか、とにかく畑にあるものを失敬しました。お腹が空けば、それでなんとかおやつ代わりになるからね。昔はおやつなんてないですからね。おやつといえば、余つたご飯でおにぎりを作つてもらつて食べるぐらいでした。』

『夏休みはだいたい川に行つて、半日以上遊んでくるっていう子供が多かつたね。グルーピで行くと、必ず先頭に立つて色々な知恵を授けてくれる



人がいるわけですよ。泳ぎ方とか、畑からどう作物を頂いてくるかとか。(笑)大人も当時は大目に見てくれてたからね。』(中新田・70代)

『川に行つて、枯れ木を集めてきてトウモロコシ焼いて食べたり、桑の実を採つたり。桑の実はそちら中にいっぱいなつていたね。』(宮崎・70代)

川遊びの中で生物に関する話を多く聞くことができた。水路には水草が生えていて、ザリガニ、ドジョウなどがいた。しかし、U字溝にしてからはいなくなってしまった。また、川にはサツコ(ハヤ)やカジカ、ヤマメ、イワナ、オイカワ、ウナギがいた。圃場整備のとき水が濁つていなくなつたが、カジカなどは最近また見るようになつたという。

『小川だから、どじょうとかが住んでるわけ。家の裏の方にも同じように川が2、3本あって、そういうまちなみだつたの。今は下水になつてしまつて、昔の面影が無いのよ。』

(宮崎・70代)

『ちっちゃい川がありまして、これが今は農業用水でせき止められていて、汚くなっています。魚がいっぱいいてね。夜は「筌」(ど)を使って、魚を捕つていたね。少しねじると一回魚が入つたら出られないようなもので、30cmぐらいのを買つたり自分で作つたりしてね。』

(中新田・70代)

『山椒の皮を鍋で煮込んで、それをそんな堀みたいな所に流すのさ。すると100mくらい効いて、魚が浮いてくるの。多分魚がしごれるんじやない

かな。後はすぐつて捕つて食べたりしたんだよ。』

(小野田・60代)

『カブトムシとかがいっぽいいて、木を揺すつたらバーッと落ちてきた。家のすぐ近くの沢に、沢ガニも捕りによく行つたね。今は沢ガニは一匹もない。』(小野田・60代)

『まちの両脇が全部水路だつた。水草が生えていて、子供たちがじやぶじやぶっと入つていた。そんな危なくない、浅い水路。U字溝にしてからドジョウもザリガニも、何ものくなつたわ。洪水は65年間生きていて1回も無かつた。』

(中新田・60代)

『田川を大川といつて、坂下橋下流の神人渕という場所で泳いでいたよ。西川北の中山まで「ザツコ」って言う魚をヤスで捕りにいつたね。』

『ウナギもいた。中学校1年ぐらいまで魚捕りして。ウナギは昭和39年ぐらいまでいたけど、もういないな。』

『カジカやヤマメ、イワナ、オイカワがいた。あと「ズボ」っていう魚で、砂にもぐる魚なんだな。』

『昔はこの後ろに洗い物もできるくらいキレイな、水路のような川があつたんだ。今は耕地整理で圃場整備のとき水が濁つていなくなつたけど最近またカジカを見るようになつたね。』

『当時はホタルもたくさんいて、捕まえたホタルを蚊帳の中に放したりした。』

(宮崎・60代)

『家の周りに用水路がありまして、毎年夏になるとホタルも見れました。あと、必ずどこの家庭でも蚊帳があつて、ホタルを捕まえて蚊帳の中で放すと、ホタルがぴかぴかつて光つてね。』

(中新田・70代)

『川の水が綺麗だつたため、遊び場だけでなく洗い物など生活用水の一部として使われていたようである。しかし、その多くは耕地整備などによりなくなつてしまい、かつての遊び場も川の形の変化や、川岸が荒れたことにより、今では遊べなくなつてしまっているようだ。』

『昔はこの後ろに洗い物もできるくらいキレイな、水路のような川があつたんだ。今は耕地整理で圃場整備のとき水が濁つていなくなつたけど最近またカジカを見るようになつたね。』

『「ババカラツカ」は、オスのカジカのことを呼ぶのだけど、顔をみるとオニババみたいな顔だからそう呼ばれてた。カジカっていうのはオス1匹に対しメス10匹いるから。子供の頃からからそういった習性みてるから、体で覚えているんだね。』

くなっています。』（小野田・60代）

『小さい頃はやつぱり川ですね。終戦の時は食べ物がなかったので、1人で川に行つて泳げるようになると魚捕つたりしていたな。だから川には愛着あるんだ。』

『鮎は昔、黙つても遡上してきてここでも捕れたけど、今は川が悪くなつて遡上率が悪くなつた。それでもやっぱり夏休みになると家族で川に行つて遊んでいた。その川が今は荒れ放題で遊べなくなつている。』（中新田・60代）

『多田川で泳いだり、そつちこつち行つてたのさ。この川はうんと広かつた。昔は名蓋川でも泳いだ。当時はどつちも土側溝だつた。』（中新田・60代）

『鹿原橋の東の方でね。夏になると朝から晩まで川で遊んだね。ずいぶん形も変わつたけど。深くて緩やかなところ、淀んだところに「淵」があつたからね。何十年前から川で遊んではいけませんつて言われて、ブールが造られてね。』
（小野田・70代）

うになり、池で飼つた金魚や鯉が死んだという。『農薬が川に流れるようになつてから、昔池で飼つた金魚とか鯉が死んだのを覚えています。でも雨で、池が満杯になつたら、どこからか魚がまた入つてくるんだよね。冬場の寒い時もそのままだと死んでしまう。』（中新田・60代）

『排水が流れていたから、川は汚かつたのね。だから橋から魚釣りしてね。』

『木と釘で作つた舟を浮かべて競争してね。材料はそこらへんの落ちている木や、製材所とかのくずとか、余つた家の材料を使つてね。』

『魚釣りをしたりお腹が減るとじやがいもを持つていつて、空き缶探して川の水を入れて火をおこして食べたね。あと屋敷と河原にグミの木があつて、それを食べたりね。あとはガラス箱使つて魚を捕つたりね。』（宮崎・60代）

川だけでなく、通学中に山遊びをするなど山でも遊んでいたようだ。自然に対する意識が、今と当時は大きく違つていたようで、山に旬の食材を探りに行つたりした。

また子供が入つて遊べるような小さな森や洞窟も

また、高度経済成長期に入ると、綺麗だった水も生活排水や農薬などによつて汚染などがみられるよ

『学校をさぼって通学路途中で遊ぶのを仲間たちの間で「山学校」と呼んでいましたね。』

(中新田・60代)

『朝吹雪になると、学校行つて1時間2時間で帰つて来たね。鹿原の人は中学校がないから、東小野田に来るんですよ。吹雪の時は集団登下校だつた。』(小野田・60代)

『春は新芽とり、夏は川で遊んだりトマトやキユウリ持つていつて食べたり、秋は栗やアケビを採つたり、キノコ採りもしたよ。冬はスキーをしてたりね。』

『山に行つて水を飲みたいときは、ツタを切つて水を飲むの。後は朝つゆを集めて飲むだとか。昔は腹も満たす術だつた訳で。そういうのを今の人たちに分かつてほしい。』(小野田・60代)

『昔は小さな森があつて小さい頃はよく遊んだ。あそこの木が生えている所に洞穴かなんかがあるて、小さい頃にろうそくとか持つていつて遊んだんだ。』(中新田・60代)

『昔は学校も冬になると通うことができないから寄宿舎に泊まつたんです。危なかつたから帰りも集団で帰れつて言われたけれども、その中でも抜け出して雪で遊んだりしてた。』(小野田・60代)

冬の遊びでは、みかん箱にスキー板を付けたソリ遊び、竹を2つに割つたものでスキーをするなど工夫して遊んでいた。また、氷が張つた川に穴を開けて魚捕りをしたり、凍つた道路の上でスケートや、雪で固まつた田んぼの上を通るなどを冬ならではの遊びをしていた。

冬の生活においては、カバンを大きなフロシキに包んで背中に背負つたり、長靴に雪が入つてこないようにならぬために藁で長靴の上を縛つたりと、豪雪地帯の様子も多く伺えた。また、吹雪のときは集団で登下校し、山辺の地域の人は冬の間は下宿することもあった。

『雪は1mは積もるね。昔はオーバーを買つても

『昔は豪雪地帯で、3月頃まで雪が降つたら根雪になつて、雪が溶けなかつた。だから、みかん箱にスキー板付けたり、竹を2つに割つたのでスキーしたりした。』(小野田・60代)

『氷の事をこの辺ではスガといって、スガ割りと
いうのは氷を割る事。』

『子どもの頃、冬は道路でスケートしたな。水を
撒いてよく怒られたよ。』

『道路の部分は両側から踏み固められて、それを
通称「馬の背」っていうんだけど、小さい頃はそ
の道から踏み外すとつぱり隠れるほど埋まつ
ちゃうんだ。』（小野田・60代）

『冬が過ぎて田んぼの固まつた雪の上を渡るのを
「ちゃんちゃん渡り」っていうんだよ。日中いくく
らか温まつて雪が溶けて、それが夜の寒さで凍る
の。すると少々重い人でも渡れるようになるの。
目的地だけ考えていくと、あたり一面まつ平らだ
から間違つて川にはまつちゃう人がいたわね。一
番最初に渡る人は実験体なのよ。』

（小野田・60代）

昭和中期でも、町と自然災害は切つても切れない
関係だった。

台風による水害が多発していたようだ。

『実際に水害を体験したのは、昭和25年の大水
害だね。堤防ぎりぎりまで水が来るなんてことは
しょっちゅうあつた。台風なんかが来ると必ず停
電になるのよ。遠くの方ではサイレンも鳴つてい
た。』（中新田・70代）

『水害も多かつた。台風で、あわや洪水になりそ
うな時もあつた。私が小学生の時に、農地を切つ
て、そつちの方に溢れてきた水を流して洪水対策
をしていた。』（中新田・70代）

昭和後期（1970～80年代）

整備によつて変わつた自然

昭和後期でも、川での遊びは続いていたようだ
が、交代でそれぞれの家から父母が監視人として
ついていたりしたようだ。一方で周辺環境が整備さ
れ、便利になつていく中で失われるものもあつた。
川がコンクリートで整備され、小さい鮎しか捕れ
なくなつたり、川自体が無くなつてしまつたりと、
風景や生態系は変わつていった。また、化学薬品に
よつて、魚や虫など川の生物たちは大きな打撃を受

けたようだ。

『年月が経つと雨や洪水で、だんだん川の形状、深い場所が変わつてくるのさ。浅くなつてたところが深くなつたり、深いところが浅くなつたり。当時、プールなんてないから水泳ぎするわけだ。』
『夏休みは交代でそれぞれの家から父さんや母さんが名札ぶら下げて監視員としてついたのさ。泳げない人の監視人でじいちゃんばあちゃんがいるのさ（笑）。遊ぶ時間は、午前と午後で、何時から何時までつて決まつてた。』（宮崎・50代）

『堤防を超えて毎日鳴瀬川まで行つて遊んだんだよね。浅瀬の方に行つたりね。増水して水が引くと川岸の方に水たまりができて、そこでライギョというナマズみたいな魚を捕つたりした。潜つたらうなぎとかもいたしね。』（中新田・50代）

『鳴瀬川の前に小さい川あつたの。そこに蟹がいっぱい飛んでいたのね。』（小野田・70代）

『小学校の前に流れていた川がコンクリートで固められて変わつてしまつた。昔は土の川だつたらヤゴとかいた。』（中新田・60代）



『昔は魚を捕って食べたんだよ。今は投網しても小さい船くらいしかかからない。あと春は川鱈。30年以上食べたことないな。』（中新田・70代）

『当時、川はたくさんあつて遊ぶことには事欠かなかつたよ。基盤整備で田んぼ15枚ごとに道路1本通すようにしたから、川がなくなつたよ。』（小野田・60代）

『私が小学校中学校くらいになつてから川がなくなつた。水害をきっかけにコンクリート詰めて川を整備したんだと思います。雪解けになるとみんな川に雪を入れるから水害になるのさ。上水道になつたのは中学なつてからかなあ。』

（小野田・70代）

『前は両脇に1mくらいの川があつたのさ。昔は洗濯の汚水とかがほとんどなかつたから魚も自由に上がつてきてた。それも40年くらい前までかな。30年くらい前からは洗濯も化学薬品を使うようになつて魚も見なくなつたな。』

（小野田・60代）

『昔、原町の近くはみんなヒバの生垣でね。私の嫁さんは原町のヒバの生垣と水路の奇麗さに感動して、この町なら暮らしていくことで結婚を決意したそだよ。各家が生垣を競っていたね。』（小野田・60代）

『みんな里山を放棄して里山が全部荒れてしまつた。一番いい例が、崖崩れや土砂崩れ。無理して道路作つたせいもあると思う。もつと自然のままに木を育てて管理していればあんな災害はないと思う。』（小野田・60代）

台風に伴つて大火が起つたなど自然災害の様子はどの時代でも伺えた。しかし当時は防火設備も充実して火事は減つてきたと言う。一方で、豪雪の様子は変わらない。地吹雪に見舞われると前も見られないくらい視界が狭まるので、目印に柳の木やポプラ

身近に自然の美しさがあつた一方で、里山は放棄され荒れてしまつたようだ。そのため、今では崖崩

ラの木を植えるなど工夫をしていたようだ。

『中新田には強い台風が来るから、大火はけつこうあつたよ。今は消火の設備も充実してきたから、減ってきたけどね。城内地区にあつたお菓子屋さんが丸焼けになつてさ。ひどかつたなあ。私が城内にいる頃だから、35、6年前位だな。』

（中新田・60代）

『雪が2m近く積もつて壁みたいになるわね。私が勤めてた頃、昭和30、31年頃や昭和5、60年の頃も同じような雪でしたよ。』

（小野田・80代）

『冬場は、特に1月～2月は北西の風、西風が強くて、雪が降ると、一寸先も見えないような地吹雪になる。それで、道の標識代わりに木を植えたんでしょうね。それが柳の木であつたりポプラであつたと思うんです。』

（中新田・70代）

『昔は1mも積もつていたから雪かきも大変だった。今は大型機械で除雪できるけど、昔はスコップさ。宮崎や小野田の方はもっと降る』

（中新田・60代）

バッハホールなどの公共施設や国道、宅地、工業団地などが造られ、徐々に自然環境が変化したこの時期は、新しい加美町の始まりを思わせる時代でもあった。それでも当時の様子は、今とは違っていたという。

『中学校でランニングをしたときに、稲刈りの後は、水がないから中を通れた。その時の景観はきれいだな、と思った。以前は田んぼのなかにバッハホールと中学校がぽつんと建つてあるだけでした。』

（中新田・60代）

『旧中新田町内の道路は変わつていませんが、国道347号ができてから、だいぶ変わりました。この国道から東の方へどんどん新しい道路ができる、宅地、あるいは工業団地ができるのが40年前からですね。北の方は水田の他は何もありませんでしたからね。』

（中新田・70代）

『当時は、そんなに車とか通つていなかつたから、どこも道路が狭かつた。みんな歩いて登校。中学生になると自転車使つていいことになつた。』

（中新田・60代）

平成（1990年代）

顕在化する環境変化と新たな取り組み

平成に入ると、川泳ぎや魚捕りなど川での遊びは激減してしまう。ダムが完成して水害は減ったが、川の水量、水質などは大きく変わってしまった。そのため、川遊びは危険だということで、親が反対するようになつたようだ。

『小野田の方にダムが出来てから洪水は少なくなった。昔は小野田から色麻の方まで水浸しになつた』（中新田・30代）

『小学校のときにサッカーを道路の真ん中でやつて怒られたので、校庭でサッカーをしたり、ドッジボールをしたりした。あとは学校帰りに、海水パンツとTシャツを着て、みんなで鳴瀬川に行つてヤス（鈎、魚を刺す道具）を持って水中に潜つて鮎を捕つた。だから学校が終われば自然との遊びだね。』（中新田・40代）

『前は川に入れたりしたのだけど、今はもう入れない。昔は木も全然なくて、もつときれいだった。今はたまに見るけど汚い。』（中新田・30代）

『農家の人も田植えとか稲刈りのときは忙しくて、家族総出で働いていた。だから子供は身近な川や、その辺の空き地とか、自分たちの行ける範囲で遊んでいた。今は子供たちだけで川に行くとなると、大人たちは駄目って言う。』（宮崎・30代）



手入れが行き届かずに荒れていってしまう場所も多い。田んぼや川など、日常的に使われ続けてきたからこそ保たれてきた自然の美しい景観は萎えてしまつた。これにより、様々な生物は棲家を失つてしまつたようだ。

『一級河川の鳴瀬川は、今は誰も手を加えていないので死んでいるんです。荒れ放題で、もう上流のすぐ周辺まで熊が来ている。全然整備されていない。』（中新田・60代）

『名蓋川も荒れていて、側溝に葉っぱが生い茂っている。田んぼを作らなくなると、側溝が汚くなつていく。側溝が汚れていくと水も流れなくなつてもつと汚くなる。』（中新田・60代）

『農薬を使うようになつてから、イナゴ捕りは全然見ないな。昔はほんとうにたくさんいたよ。』

（中新田・70代）

『カエルの数も少なくなつていて、昔家の前でも見たんですけど、最近見られなくなつたんですよね。小さいカエルはいっぱいいますが、大きいカエルはあまり見てないです。』（中新田・60代）

『虫捕りに入れるような雑木林は殆どない。放棄された土地は、人もいないので荒れてしましました。廃校になつた中学校の体育館もあつたけど、耐震基準に達してないつてことで解体してしまつたね。』

（小野田・60代）

しかし、最近では川の水がきれいになつたところもあり、川に魚が戻るようになつたという報告もある。

『上流にダムができた当初は汚かつたのだけど、今は川の水もきれいになつてきましたね。時間とともに少しづつ魚も戻ってきた。』

『ここら辺ではカジカが水質の一つのバロメータになつてゐるからね。結局カジカにしても川魚にしても川の中の虫や藻などの餌が増えることが大事なんですね。』（小野田・60代）

『鳴瀬川の支流の矢坪川ではイワナやヤマメなどの渓流釣りが好きな人は結構入つてきているようです。本流の鳴瀬川では鮎、イワナなどは釣れないでしよう。ただ、カジカが増えたという話は聞きます。』（小野田・60代）

自然風景はその時々の生活様式や制度と密接に関わっている。生活の中での山との関わりが減り、山崩れや崖崩れが起こって山の美しい風景は壊れつつある。山から村へ下りてくる動物も増え、近年ではそれによつて被害も出ている。人も動物も大変生きづらくなつてきていているのである。

『私が所有している山では、昔と違つて木材の価値が下がつてしまつた。今は誰も山に訪れないのでも、山がどんどん荒れてしまつた。それが山崩れや崖崩れの原因にもなつてゐると思います。中山間地域での農家では、平場と比べて費用が多くかかるてしまうので、ほとんどが兼業農家です。』（小野田・60代）

『山のものが不作だから熊やサルが下りてくるの。フェンスとか壊されるので、電柵とか回して熊対策もしてゐるんだけど、熊は体当たりして壊すわね。それにサルも増えてきてる。だから大変生きづらくなつてきてるの。彼らも生きづらくなつてきてるし。だから山の人たちは諦めて作物なんて育てないのよ。』（小野田・60代）

また、町の近代化によつて、伝統的な住まい方と関わつていた様々な風景は失われていつた。昔から

ある居久根は「倒れたら危ない」という理由で切つてしまふ家が多い。

『家に生えていた居久根は、前の大風で倒れたから、全部切つちやつた。「風を防ぐ」つていうよりも「倒れたら危ない」という危険性の方が高くて、切つてしまふことが多いんですね。周りの家も居久根を撤去しているね。居久根の跡地に家を建てる人なんかもいるね。電柱や電線にかかる範囲なら電力会社が切つてくれるんだけど、そうでない場合は自分で何とかしなきゃならないんだ。』『居久根で風から守る必要があつた茅葺き屋根が無くなつた事と、薪などの活用がなくなつた為に、木が大きくなり過ぎたのが原因だらうね。塀やフェンスも増えたしね。』（宮崎・60代）

『居久根は倒れてしまうこともあるから切つてしまふ所が多い。だから居久根は昔の半分以下になつてゐるんじやないかな。茅葺き屋根も減り、風で飛ばされる心配もないから。』（小野田・60代）

道路整備や区画整備により生活環境が便利になる一方で、住宅地の用水路など地域の特徴が失われたり、遊び場がなくなつたりと、生活に変化が表れた。

また圃場整備により田んぼの風景は大きく変わつてしまつた。

『農業用水から水路が網の目のように分水して流れ、中新田は「水路の流れる水の音がする街」だつた。しかし、石畳ができた段階で聞こえなくなつた。その水路は、鳴瀬川から流れ来て七十七銀行の途中で分水されて、花菜の表通りを

縦横に流れる。勾配があつて、徐々に東に下がつている。』（中新田・60代）

『昔はもつと川幅も深さもあつたし、それに見合う水量もあつたんだよね。区画整備する前の用水路は人が入つて遊ぶにはちょうど良い場所だつた。』（中新田・50代）

『昔はコンクリートの堤防はなかつた。でも公園の手前の方まで、今より水はもつとあつたよ。そこでも魚が捕れた。』（中新田・30代）

『瑞雲寺の前の道はやすらぎ通りと呼ばれていました。お寺には赤松の木があつたんです。銀杏の木や桜の大木、ケヤキの木。だから昔は一日中木陰だつたから涼しかつたですよ。もう17、8年前になるね。ここにある樹木を全部伐採して、墓

地の区画整理をしたんですよ。』（中新田・70代）
『周りの風景で一番変わつたのは田んぼだね。区画整理して大きくしたから。この辺は10aの田んぼが今は1haの田んぼになつた。昔は道路が狭かつたけど、今は広くなつた。またビニールハウスが増えた。』（中新田・70代）

『昭和45年くらいから圃場整備が始まつた頃が、俺らの原風景なので、風景が変わつたというはないな。』

『人が勤め、給料やらなんやらが保障されてしまつたので、助け合いがなくなつたかな。』（小野田・50代）

『ここは平成10年に区画整備が終わつた。農道や、県道のバイパスの変化が道路に多少影響を与えた。』（中新田・50代）

道路、川、農地の整備による自然風景の消失に対して問題意識を感じている人、かつての風景を取り戻そうと実際に行動に出ている人も少なくない。

『私が戻ってきたとき「私が育つた宮崎はどこ行つたんだろう?」って思つた。前と比べてあ

まりにも小綺麗になつたし。昔は農地も裸足で歩いた。今は庭と畑の区別がつかないくらい綺麗になっちゃって。』（宮崎・70代）

『道路ができただけでここまで景観が変わるとは予想もしなかつたね。道を造るというのは時代の流れとともに必要なことでしようけれども。町並みの景観と道路の変化をどのようにマッチさせるのかを考えるのは非常に大変なことでしようね。やはり長い歴史を持つている場所ほど、景観に関する保存は徹底していますね。』（中新田・70代）

『今、うちの集落で畠の再生プロジェクトを計画している。誰もが便利なU字溝のすべてを否定している訳ではないんだけども、それによつて失われてしまつたものや、少なくなつてきているものをなんとかして残したい。』（中新田・50代）

このように自然が失われている状況の中でも昔から変わらず、加美町の人々に愛されている風景も残つてゐるようだ。特に薬菜山はまちの象徴的な存在で、風景としてもイベントの拠点としても親しまれています。

『私の一番好きな眺めは、堤防を上がつたとこ

ろから眺める船形山と薬菜山。あと栗駒山。この景観がきれい。春夏秋冬と、素敵な光景です。』
（中新田・60代）



『好きな風景は旭橋の上から見た薬菜山の風景かな。「加美富士」って呼ばれてるのさ。稻がどつさり実った黄色い田圃と山、晴れた日に見ると澄んでいて、ほんとに良い景色なんだ。』

（小野田・70代）

これまで「加美町の自然」について確認してきたが、鳴瀬川などの水辺を中心に、人々は昔から加美町の自然と密接に関わってきた。全体として、機械化や開発により生活が便利になる一方で、豊かな自然がなくなつていく様子が読み取れる。

戦前の昭和前期は、自然災害が多発していた。昭和中期になると川遊びの全盛期で、様々な遊びが行なわれていたようだ。昭和後期は、徐々に川や側溝が整備され始めてきた頃で、その中でも今はなくなってしまった川や生物などを懐かしむ声も聞かれた。平成になるとダムが完成し、洪水などのリスクは減った一方で、自然へのダメージは非常に大きかつたようだ。また、土側溝の水路は殆どなくなり、U字溝に整備された。便利にはなったが失ったものも大きかったようだ。近年では、現状に嘆く声も多く聞かれ、それに対して問題意識を感じていたり、かつての自然風景を取り戻そうと活動を起こしている人もいる。

以上が「加美町の自然」としてまとめられる。

